

令和4年度
入学試験問題

国語

(50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力高等学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ — 次の — 線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、証拠を隠匿する。
- 2、廉価なものを多く扱う店。
- 3、互いに深く恋慕する。
- 4、設備の老朽を不安視する。
- 5、巧妙に人を欺く。
- 6、事件にソウグウした。
- 7、独立の気運がタイドウする。
- 8、ジアイに満ちたまなざし。
- 9、その国のナイフンは長く続いた。
- 10、努力をオコタる。

□ — 線の言葉が正しく使われているものはA、そうでないものはBとして、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、医者も病気になることがあるとは、まさに紺屋の白袴だ。
- イ、岡目八目ということだろうか、書記だった私は確な意見を思いついた。
- ウ、結婚式で美辞麗句を述べることができるよう念入りに準備した。
- エ、あの企業は新入社員を青田買いしているそうだ。
- オ、ほぞをかむほどの努力を重ねて成功したいと思う。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大学生の「僕」(青山霜介)は三年前に両親を交通事故で失い、深い喪失感の中にあつた。水墨画の巨匠・篠田湖山に気に入られ、内弟子となり、湖山の孫である千瑛と「湖山賞」をかけて勝負する。霜介は兄弟子の湖峰や湖栖の他、湖山と並び巨匠である翠山にも指導を受け、水墨画の腕を上げてゆく。「湖山賞」は千瑛が受賞し、「僕」は審査員特別賞である「翠山賞」を与えられた。本文は湖山賞表彰式後の展覧会場での場面である。

僕は千瑛の傍に立った。

千瑛は僕の絵を注意深く眺めていた。千瑛の横にしばらく立っていても、こちらには目もくれずに絵を見つめ続けている。

千瑛の絵に比べれば、数段見劣りする **A** 花の構成だ。白い菊が上から下に五輪並び、余白が多く、彩色は施されていない。華やかさに欠ける風情だった。描かれた花弁にも強い色彩を感じさせる要素はない。

「言葉もアないわね……、本当に」

千瑛はそう言ったが、花弁の一つ一つ、葉の一片一葉が、僕の言葉であり想いだった。

一つの花びらにさえ、自分の心があるがままであることを信じて、限りなく花に寄り添いながら、花に教えられるように手が動いていくことを感じていた。あの夜の僕には絵は描くものではなかった。花に描かされるもの、もつと言えば、花に教えられるもの、だった。湖山先生の言ったことは正しかった。花に教えられ、手があるがままに動いているときほど、 **B** ことだけれど、自分の想いが筆致に反映していた。その一筆の筆致には、光があり、光と反対の影さえも水と墨の調和の中で表現されていた。

光を帯びた無色透明な液体と、光を暈す微細極まりない物質の融け合う美を、最小の単位として、水墨画は構成されている。

それはもしかしたら、命の根源に限りなく近い姿なのかもしれない、と、出来上がった五輪の菊を眺めて思った。すべての菊を数本の茎でつないだとき、僕自身の手も、意識しないまま、まるで間違いを犯さなかったことに気が付いた。ただ花に導かれて、自然だった。それが、どれだけ拙く見えても、うまく見えても、僕にはどうでもよかった。

湖山先生が伝えたかったのは、たぶん、こういうことなのだろう。

①「花に教えを請え」

と、とても簡単に言われたけれど、その背後にあつた術理や、思考や、実感は、言葉をはるかに超えていた。それはまさしく、描くことでしか説明できないものだった。

菊を描くことができた喜びは、何かを完成させることができた喜びではなかった。そうでなくて、小さな命と共に生きていて、自分もまた命の一つなのだと感じる繊細で、みずみずしい瞬間だった。そこには意志はなかった。ただその経験だけがあった。

描き続けていたほんの C 瞬間、自分が幸福であったことに驚きながら筆を置いた。

その絵が、いま千瑛の目の前にあった。

千瑛は絵を見て、最後には微笑んだ。

「これが青山君の美なのね」

と、千瑛は独り言のように呟いた。それから大きく息を吐いて、肩の力をガクッと抜くと、諦めたように笑って見せた。僕もその朗らかなしぐさを見て笑ってしまった。千瑛は握手を求めてきた。僕がその意味が分からず躊躇っていると、千瑛は整った大きな唇を開いて、

「湖山賞は私が頂いたけれど、勝負は私の負けね」

と D 声で言った。

僕はわけの分からないまま、千瑛の瞳に理由を問い返した。

「お祖父ちゃんも翠山先生も本当は、あなたに湖山賞をあげたかったのよ。なんとなくそんな気がするわ。技術では確かに、私があなたよりも上をいっていると思う。でも、^②水墨の本質に、命そのものに、より深くぎりぎりまで近づけたのはあなたの方よ。この違いは、ほかの人には分からないかもしれない。でも私や湖峰先生や湖栖先生、そしてお祖父ちゃんたちには、はっきりと分かる。水墨が心を描く絵画、命を描く絵画なのだとしたら……、私の負けね」

僕は千瑛の手をゆっくりと握った。

「違うよ、千瑛さん。千瑛さんが受賞したことには、確かに意味がある。僕はこの絵を描きながら、自分に足りなかったものを感じたんだよ」

「あなたに足りないもの？」

「そう。僕は確かに自分の心を描けたかもしれない。でも、自分の生き方を描いたわけじゃない。千瑛さんの技術は、千瑛さんの美しい生き方のものだ。水墨に専心し、ひたむきに何かを続けて追い求めてきた純粋な姿勢。そのひたむきさは、誰かの心を動かすんだと思う。僕は、千瑛さんの絵に動かされた。僕にはそのことが分かるよ」

「ありがとう、青山君」

僕はうなずいた。

「そのことを湖山先生も翠山先生も理解しているんだよ。水墨が線の芸術なのだと思えば、線とは生き方そのものでもあるから。千瑛さんはそれを描くことができたんだ。湖山賞、受賞おめでとう。僕はあなたの絵があったから、ここにいらんだよ」

千瑛はうなずいた。目に涙を浮かべていた。

真つ黒な二つの瞳がしっかりと僕を捉えていた。

僕は微笑んだ。

③この三年間、ほとんど笑わなかったせいで、表情筋が運動不足だったから何処か不自然に見えたのかもしれない。千瑛は、僕が微笑んでいることに気づくと、大きく笑った。その笑顔はまるで大輪の牡丹ぼたんのようだった。

僕にとつて、受賞よりもその笑みのほうがずっと価値があった。誰かといっしょに同じ時間を分かち合うことの意味を、こんなときどうやって伝えたらいいのだろうか？

「これからもよろしくね。青山君」

と千瑛は言った。優しい声だった。

僕はうなずいた。

千瑛はまたすぐに祝辞を述べに来た多くの人たちに取り囲まれてしまい、僕はそこから離れた。

僕は展覧会の会場を一人でゆっくりと回って、たくさんの水墨画を丁寧に眺めた。百花繚乱ひゃっかりょうらんと言ってもいい壮麗な景色だった。それぞれの人たちが自分たちの想いを描き、壁を飾っていた。僕はその壁に飾られた数えきれないほどの絵を、これまで感じたことのない穏やかな気持ちで眺めていた。

僕はふいに自分がずっと思いつけなかった言葉に気が付いた。

「僕は満たされている」

と、まるで他人事ひじごとのように、言葉にした。自分自身の幸福で満たされているからじゃない。誰かの幸福や思いが、窓から差し込む光のように僕自身の中に映り込んでいるからこそ、僕は幸福なのだと思った。

僕は一周して、会場の入り口付近の自分の絵の前に戻ってきた。描いた作品を、もう一度眺めながら、僕はごく自然に、湖山先生がどんなふう

に僕の心を見ていたのかということが分かった。

湖山先生もまた誰かの幸福や想いを、自分自身の幸福のように感じながら生きていたのだろう。心の内側に吹き込んでくる風や光を、あの穏やかな瞳は見ていたのだ。誰かの孤独や苦しみも当たり前のように自らの内側に映り込んでいたのだ。

「君が生きている意味を見いだして、この世界にある本当にすばらしいものに気づいてくれれば、それだけでいい」

と湖山先生は言っていた。

その言葉のすべては分からないけれど、僕は自分の傍にいる誰かが幸福であることや、たくさんの笑顔の中に佇たたずんでいられることが、ただ幸

福だった。湖山先生も同じ気持ちで絵を描き続け、伝え続けてきたのだろうか。

僕はもう独りではなかった。

「④ 美しいな」

と、僕は思わず呟いていた。

呟いた後に、呟いた言葉の意味をゆっくりと考えていった。僕は目を閉じた。そうするとほつきりと、それは浮かび上がってきた。

僕は、線を思い浮かべていた。

今日この場所にたどり着くまでに描いた線のこと、それから多くの人が紡ぎ合っている線のことを僕は考えていた。多くの人がたった一つの線を紡ぎ合い、たった一つの線を結び合って生きているようにも思えた。

連綿と続くその流れの中に、湖山先生は僕を組み込んだ。僕はその流れの中に佇んでいた。

僕は長大で美しい一本の線の中にいた。

線の流れは、いま、この瞬間も描き続けていた。

⑤ 線は、僕を描いていた。

(砥上 裕将「線は、僕を描く」より)

問 一、

 にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、地味な イ、穏やかな ウ、小さな エ、はでな オ、冷ややかな カ、大きな キ、わずかな ク、不思議な

問 二、

 線ア「ない」・イ「ない」・ウ「みずみずしい」・エ「美しい」のうち活用形の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。またその活用形を漢字で答えなさい。

問 三、——線①「花に教えを請え」とありますが、これと類似の主題を含む文章として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「能くあゝ無造作に鑿ののみを使って、思うような眉まみえや鼻はなができるものだな」と自分はある感心ひとりじこしたから独言ひとりごとのように言った。するとさっきの若い男が、

「なに、あれは眉まゆや鼻はなを鑿うで作るんじゃない。あの通りの眉まゆや鼻はなが木の中に埋うまっているのを、鑿うちと槌ちの力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違まちがうはずはない」といった。

自分はこの時始めて彫刻はたとはそんなものかと思ひ出した。果はたしてそうなら誰たれにでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王におうが彫うつて見たくなつたから見物をやめて早速家へ帰かえつた。

(夏目漱石「夢十夜」)

イ、山路を登りながら、こう考えた。

智ちに働はたらけば角かどが立つ。情なさけに棹さおさせば流ながされる。意地いぢを通とほせば窮きゆう屈くつだ。兎角とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高たかじると、安やすい所へ引き越こしたくなる。どこへ越こしても住みにくいと悟さとつた時、詩うたが生なれて、画えが出来る。

人の世を作つくつたものは神かみでもなければ鬼おにでもない。矢張り向むかう三軒さんけん両隣りやうりんりにちらちらする唯ただの人ひとである。唯ただの人が作つくつた人の世よが住すみにくいからとて、越こす国くにはあるまい。あれば人でなしの国くにへ行いくばかりだ。人でなしの国くには人の世よよりも猶なほ住すみにくからう。

(夏目漱石「草枕」)

ウ、自分はそれから庭にわへ下くだりて、真珠貝まじゆがいで穴あなを掘ほつた。真珠貝まじゆがいは大きな滑なめらかな縁ふちの鋭すどい貝かいであった。土つちをすくう度に、貝かいの裏うらに月の光ひかりが差さしてきらきらした。湿しめつた土つちの匂においもした。穴あなはしばらくして掘ほれた。女むすめをその中なかに入いれた。そうして柔ならかい土つちを、上うへからそつと掛かけた。掛かける毎たびに真珠貝まじゆがいの裏うらに月の光ひかりが差さした。

それから星ほしの破片かけの落ちたのを拾ひろつて来て、かるく土つちの上うへに乗のせた。星ほしの破片かけは丸まるかった。長い間ま天空てんくうを落おちている間に、角かどが取とれて滑なかになつたんだらうと思おもつた。抱かかき上げて土つちの上うへへ置おくうちに、自分の胸むねと手てが少し暖ぬくなつた。

(夏目漱石「夢十夜」)

エ、絵えは無む論ろん仕上しじやうつていないものだらう。けれども何処どこも彼処まなも万遍まんべんなく絵えの具ぐが塗ぬつてあるから、素人しろうとの三四郎しやうらうが見みると、中々ちんぢん立派りつぱである。旨うまいか無味まじいか無論むろん分わらない。技巧ぎこうの批評ひひひの出来できない三四郎しやうらうには、ただ技巧ぎこうの齎もたらす感かじだけがある。それすら、経験けいけんがないから、頗すこる正鹄せいこくを失ししているらしい。芸術げいぎゆの影響えいげに全然ぜんぜん無頓着むとんぢやくな人間にんげんでないと自らを証あかし拠た立てるだけでも三四郎しやうらうは風流人ふうりゆうにんである。

(夏目漱石「三四郎」)

問 四、——線②「水墨の本質」とありますが、千瑛のいうこの言葉を「僕」はどのようなものだと考えていますか。文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

問 五、——線③「この三年間、ほとんど笑わなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、喜怒哀楽を素直に表情に出すことを自ら強く禁じて、水墨画を描くことに集中していたから。

イ、自らの感情を自覚することよりも、菊に同化することを大きな目標として日々を生きてきたから。

ウ、交通事故で両親を失ってから、一人きりの孤独な精神世界に生き、笑うことを忘れていたから。

エ、菊を描くことはできたが、何かを完成させる喜びを感じる事が出来ず全く笑えなかったから。

問 六、——線④「美しいな」とありますが、「僕」が「美しい」と呟いたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、展覧会場にある全ての作品が、穏やかな気持ちを抱かせてくれるとともに、水墨画の本質を思わせる確実な技術を伴った「線」で構成されていると感じたから。

イ、孤独感にとらわれ続けてきた「僕」だが、自分が描いた線を見ることで、自分へと続く生命の流れは様々な思いに結びついていると感じたから。

ウ、展覧会の会場の水墨画が百花繚乱とも言える壮麗な美を持っており、それらを描いた人たちの芸術に対する思いがあまりにも強烈だと感じたから。

エ、これまでは自分が水墨画の線を描くと考えていたが、実は連綿と続く人々の営みの中で生き方そのものに自分の線を描かされていると感じたから。

問 七、——線⑤「線は、僕を描いていた」とありますが、これはどのようなことですか。「自分一人」「多くの命」という言葉を必ず使って、五十字以内で答えなさい。

問題は次ページに続きます。

する合理性や効率性に縛られて、自由な創造行為とははるかに遠いところにある。**イ**日常生活を抜けだしている分だけ社会からの強制が働かないし、物を生産したりサービスを提供したり損得を計算したりする行為ではないから、合理性や効率性に縛られることも少ない。どうふるまうかは各自の自由な主体性にゆだねられている部分が大い。ということは、遊びがどう展開するかはきわめて不確定だということで、遊びにおける気分の昂揚は、不確定の状況に身を置く不安と、自他の創意と工夫によって不確定を確定へともたらす主体性の発現とがからまり合って生みだされるのだ。もともと気分の昂揚が予想され期待され、その予想と期待に応じるように気分が昂揚すると、遊びの世界は日常世界とはちがう華やかさを帯びてくる。それが遊びの楽しさだ。

そうした楽しさは遊ぶ人びとの気分の昂揚によってもたらされたものだが、気分の昂揚がひたすら感情的に追求されると、遊びは無秩序な乱痴らんち気騒ぎになって、それでは楽しみが持続しない。**ウ**遊びは一回ごとに完結するもので、いつまでも楽しさが持続することはないが、一回の遊びの時間内では楽しさが持続するのが望ましい。遊びに、それなりのルールや作法や仕掛けや段取りが存在するのは、楽しみの持続を願う多くの人びとの、無意識の、あるいは意識的な、知恵のたまものなのだ。ルールや作法や仕掛けや段取りは、なによりも、遊びを楽しいものにするためのものだ。

その点で、遊びのうちにある秩序は仕事の秩序とは質を異にする。

仕事の秩序は合理性と効率性を基本とする秩序だ。**エ**どれだけ短い時間に、どれだけ人手を少なくして、どれだけ多くの物を作れるか。どの部署に、どんな人物を、どんな規模で配置するか。外からの注文や要望や苦情にだが、どう対応し、内部の動きにそれをどう反映させるか。……そういった配慮のもとに仕事の秩序——部局の設置、責任の分担、人員の配置、生産の規模、労務管理、支社との連携、関連会社との協力体制、等々——が組み立てられ、情勢の変化に応じて秩序はさまざまに手直しされる。組み立てにも手直しにも合理性と効率性への配慮が欠かせない。

そこが遊びの秩序は決定的にちがう。合理性と効率性への配慮はゼロではないが、それが秩序の基本ではない。**オ**どう気分を昂揚させ興奮の波を作るか。いいかえれば、どう遊びを楽しくするか。そうした配慮が秩序の——ルールや作法や仕掛けや段取りなどの——基本だ。前の遊びとつながらなくてもよい。遊びの始まる前にあった出来事ともつながらなくてよい。遊びの後に来る出来事ともつながらなくていいし、後続の遊びともつながらなくてよい。遊びが始まって終わるまでの流れが、**④**緊張と弛緩しんかん、動と静、リズムとハーモニーを備えた充実した時間をなし、そこで楽しい気分の昂揚が味わえることがなにより大切なのだ。遊びの秩序は、まずもって、そういう充実と楽しさを作りだし維持するためにある。秩序の作りかたという点から見ても、遊びは、衣食住という暮らしの土台からはやや浮いたところがあり、生活の直接の必要や、生活に直接に役立つ有用性や有益性を逸脱いっだつした営みだということができる。必要や有用性や有益性を逸脱しているからこそ、楽しみを純粹にそれとして追求することが可能なのだ。

問一、A・Bにあてはまる言葉を、文章中からそれぞれ二字で探し、抜き出して答えなさい。

問二、――線ア、ウの言葉を文法上の意味によって分類したとき、同じ意味に分類されるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三、――線①「遊びに逃避らしき意味合いや余業らしき意味合いがこもるのは、遊びと日常生活との関係からすれば必然なことだ」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる表現を、文章中の言葉を使って、五十字以内で答えなさい。

筆者は五十字以内が遊びだと考えているから。

問四、――線②「楽しみの内実」とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、しがらみから解放されて自由であること。

イ、はじめと終わりのある完結したものであること。

ウ、一定の秩序のもとで予期された気分の昂揚があること。

エ、仕事に求められる合理性や効率性をまったく考えなくてよいこと。

オ、気分の昂揚がひたすら感情的に追求され、いつまでも楽しさが持続すること。

問五、――線③「日常世界にしっかりとほめこまれた仕事や労働」とありますが、これと対照的な内容を表している表現をこれより後の文章の中から三十三字で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問六、――線④「緊張と弛緩、動と静、リズムとハーモニー」を比喩的に言い換えた表現を文章中から五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問七、文章中には次の一文が抜けています。この文を入れるべき最も適当な箇所を文章中の[ア]～[オ]から選び、記号で答えなさい。

が、遊びはそうではない。

問八、この文章の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、遊びが仕事を含む日常生活と完全に切り離されることのない連続性をもつ関係にあることは、遊びの魅力をより増幅させることにつながっている。

イ、遊びが仕事とは異質なものである以上、衣食住という暮らしに不可欠なもののために行う仕事は遊びよりも優先されなければならない。

ウ、人々は意識的であれ、無意識のうちであれ、非日常的な時間を求めているため、非日常的な時間である遊びは楽しいものとして受け入れられる。

エ、遊びが安定的な日常生活とは異なる不確定的な状況を帯びたものであり、その中に緊張状態が存在することは、遊びが人々にとって楽しいものであるための一つの要素である。

オ、遊びの秩序に合理性や効率性への配慮が求められる必要はまったくなく、遊びを楽しむものにするためだけに遊びの秩序は存在するべきである。

【五】 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 駿河国と遠江国との堺に、河有り。名を大井河と曰ふ。その河の上(ほとり)に鵜田の里有り。これ遠江国の榛原郡(はりはらのこほり)の部内なり。奈良の宮に天の下治めたまひし大炊(おほひ)の天皇の御世、天平宝字の二年の戊戌(つちのえいぬ)の春の三月に、その鵜田の里の河の辺の沙(なほ)の中に、音有りて曰ひしく、「我を取れ、我を取れ」といふなり。時に僧有り。国を経てそこを行き過ぐるに、その時、「我を取れ」と曰ふ音、猶(なほ)し止まず。僧呼(お)び求むるを、邂逅(たまたま)に聞くこと得たり。沙の底に音有り。埋もれたる死人の蘇(さ)め還りたるなりと思ひて、掘りて見れば、葉師(か)の木像有るなりけり。高さ六尺五寸、左右の耳欠けたり。敬礼して哭(な)きて言(まう)さく、「我が大師や、何の過失(あやまち)有りて、この水難にあひたまふ。縁有りて、偶(たま)に値(あ)ひまつれり。願(ねが)はくは我修理(し)しまつらむ」とまうす。知識(ち)を引率(ひ)し、仏師(ほとけ)を勧請(かんとく)して、仏の耳を造らしめ、鵜田の里に堂を造りて、尊像(そんざう)を居(お)きて供養す。今に号(なづ)けて鵜田堂と曰ふ。この仏像(ほとけ)、験(しる)有りて光を放ち、願(ねが)ふ所を能く与へたまふが故に、道俗(だうぞく)帰敬(きけい)す。

(「日本霊異記」より)

- (注1) 「沙」……………砂。
- (注2) 「邂逅に」……………偶然。
- (注3) 「知識を引率し」……………「信者に呼びかけ」の意。
- (注4) 「勧請して」……………「頼み迎えて」の意。
- (注5) 「験有りて」……………「靈験あらたかだ」の意。
- (注6) 「道俗帰敬す」……………「僧も俗人も信じて敬っている」の意。

問 一、——線①「駿河国」とありますが、これは現在の何県あたりの国ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、岩手県 イ、静岡県 ウ、奈良県 エ、長崎県

問 二、——線②「我を取れ、我を取れ」とありますが、これは誰の声ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、天皇 イ、僧 ウ、死人 エ、薬師仏 オ、仏師

問 三、——線③「僧」とありますが、この主語を受ける述部はどこですか。文章中から五字以上七字以内で探し、抜き出して答えなさい。ただし、句読点は含みません。

問 四、——線④「願はくは我修理しまつらむ」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、私が修理してさしあげます。

イ、どうか修理をお願いします。

ウ、願いを叶えてくれるなら修理します。

エ、私たち仏師に修理させてください。

問 五、この文章の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、天皇は天下泰平を祈願するために、鶴田の里にいう評判の高い仏師に命じて黄金の仏像を造らせた。

イ、仏師は傷ついた薬師仏を砂の中から見つけるとすぐに修復に取り掛かり、光り輝くばかりの姿に仕上げた。

ウ、ひどい水害で片耳を失った仏像は、信者たちによって手厚く供養され、新しく建てた鶴田堂に安置された。

エ、通りがかりの僧によって助け出された仏像は、修復されたのち堂にまつられ多くの人々の願いを叶えた。

